学校名：館山市立神戸小学校

氏名：下村　圭

［担当教科：小学校全教科］

- 実践教科等：総合的な学習の時間
- 時間数　：7時間＋
- 対象生徒：小学校4年生
- 対象人数：25人

1 単元名

つながろうエルサルバドル！

2 単元の目標 （ESD の能力・態度）

藍染め作品づくりなどを通して国際理解を深め、自分たちの生き方を見直し、今の自分にできることを考え、行動化することができる。

（つながりを尊重する態度）（コミュニケーションを行う力）（進んで参加する態度）

3 ESD（持続可能な社会づくり）の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性

・日本とエルサルバドルとの文化、地理、経済、歴史等の違いに気づく。【多様性】
・地球の動植物を生かす自然環境やエネルギーは限りあるもので、資源を大切に使わなければいけないことを理解する【有限性】
・世界には教育を受けられず、そのためにまずしい暮らしをしている人がいることを知り、恵まれた環境にいる人が援助することの価値を学ぶ、【公平性】
・開発途上国の問題について考え、今の自分にできることを考え、行動する。【責任性】

4 単元の指導について

（1）教材観

国際理解教育の推進は、「総合的な学習の時間」における重点項目の一つにあげられている。本校は千葉県最南端部に位置し、海、山などの自然にめぐまれたのどかな環境である。子どもたちが外国人と関わる機会は学校やその他の場面も含めて多くはない。しかし、中学を卒業すれば社会へ出ていき、多くのものを見、知ることになるだろう。世界はグローバル化が進んでおり、南房総地域で育った若者も決して無関係ではない。本校のある館山市を含む南房総地域は過疎化が進んでおり、「就職口が少ない」→「人口流出」の悪循環が生まれている。このような現状に危機感を抱くとともに、いっそ「南房総から世界へ」向かえる人材を育てることも可能なのではないかと考えた。そしてそれは日本のこれからの国際社会での進路とも合致すると考える。資源にとぼしい我が国が、途上国へ輸出できるのは国際協力に長けた優秀な人材であろう。人類が競争ではなく共生への道を探る中、日本のありようとして大切なことだと考えた。そのような中で、子どもたちにとって、自分たちとは違う貧しい途上国が現実にいることを学ぶことは21世紀を生きる彼らにとってとても価値あることだと考える。そこから「自分たちにできることは何だろう」と考える心を大事にし、育むことこそ国際化社会に必要な教育だと考える。

本単元は、自身がエルサルバドルへ研修に行った際に体験したことを紹介する形で始められる。現地で撮影した写真を使ったフォトランゲージ・現地で集めたおもちゃや楽器、ハンモックなど・藍染めハンカチづくり・ワークショップ版「世界がもし 100 人の村だったら」・「ESDクエスト」らを使用し、日本とエルサルバドルの共通点・相違点について、実際に自分が触ったり、遊んだり、体験できるものを通して理解し、やがて開発途上国が抱える諸問題に気づき、自分たちに何ができるか考え、行動していくことを目指す。この学習を通して、子どもたちが世界各国の人々と共生していこうとする態度を養っていきたい。

（2）児童生徒観

受け身の子どもが多い。未知のものに関して、保守的な自分のものさしを使って対応している印象

を受ける。目の前にあるものに強く興味を示す子が多い。夏休みにエルサルバドルを訪れたことを予想させる便りを送ったので、そこで興味をもってくれた子が多かった。

（3）指導観

①身の周りのもの、実際の体験と合わせて具体物や実際の活動を取り入れて授業を展開していきたいと考えた。

②はじめは分かりやすい親近感から、自己の問題意識へ。その自然な流れは、後で振り返って他者への拡散行動にも活用できるよう意識させていきたいと考えた。

③枠のみのワークシートを用意し、毎回学習課題を書き込みながら同じ枠で学習を積み重ねた。そこでは、子どもたちの疑問から学習課題がスタートし、分かったことや感じたことを書き留めた後、次の疑問から新しい学習課題が生まれ、次時につなげていくという形をとった。

④本学習過程では実際に何かをする、ということにこだわった。ささいなことでも、行動化してこそ意味があると考えゴールを設定した。

5 評価規準

観点	課題設定の能力	自己の生き方	学び方・ものの考え方	（問題解決の能力）※7 時限以降
評価規準	エルサルバドルと日本との違いから、開発途上国が抱える諸問題について気づき、問題意識を持つことができる。	開発途上国のために、自分たちに何ができるか考えることができる。	開発途上国の諸問題について表現するためにどのような方法が適しているか考えている。	（国際協力の大切さを、相手に応じて自分が伝えたい情報を取捨選択してまとめ、伝えようとしている。）
評価方法	ワークシート 発言	ワークシート 発言	ワークシート 発言	（発言） （制作物）

6 単元の構成

※太枠の授業内容詳細を「7授業事例の紹介」に記載

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	エルサルバドルってどんな国？	エルサルバドルの地理的条件、言語、文化に触れ、異文化への興味関心を高める。	クイズ フォトランゲージ 通貨紙幣、パスポートなど
2	エルサルバドルと日本の同じところを見つけよう！	おもちゃなどに触れ、主に日本と同じところ、似ているところを見つける。	おもちゃ、楽器、ハンモック、教科書 現地で服用した薬
3	藍染めハンカチづくり	藍染めハンカチづくりを通して日本とのつながりを感じる。	講師を招いてのワークショップで藍染めハンカチをつくる。
4	エルサルバドルと日本のちがうところを見つけよう！	エルサルバドルと日本のちがい、エルサルバドルのかかえる問題について知り、感想や考えを出す。	フォトランゲージ
5	世界がもし100人の村だったら	国家や民族の多様性と世界の貧困、教育の格差などに気づく。	ワークショップ版「世界がもし100人の村だったら」の実施
6	日本とちがうまずしい国のために何ができるだろうか	JICAのボランティアの活動を知り、日本のはたらきについて考える。	JICAボランティアの写真・映像等
7	今のぼくたちに何ができるだろうか	途上国や地球環境のために自分たちに何ができるか考える。	＜授業の詳細を 7 に記載＞ 教材「ESDクエスト」の実施
＋ 今後の展開	広める計画を立てよう！	途上国や地球環境のための活動の計画をたてる。	役割分担し、劇・展示・読み聞かせ等で周知をはかる

7 授業事例の紹介

小単元名【 今のぼくたちに何ができるだろうか 】

（1） 指導案

（ア）実施日時　　12月12日（金）第5・6校時

（イ）実施会場　　4年教室

（ウ）本時の目標　　途上国や地球環境のために自分たちに何ができるか考えることができる。

（エ）指導のポイント　教材「ESDクエスト」を行って得た知識をもとに、自分の問題として考え、話し合いをしながら決めていく。実際に何をするか、決めたことを次回以降行動に移していく。

（オ）本時の展開

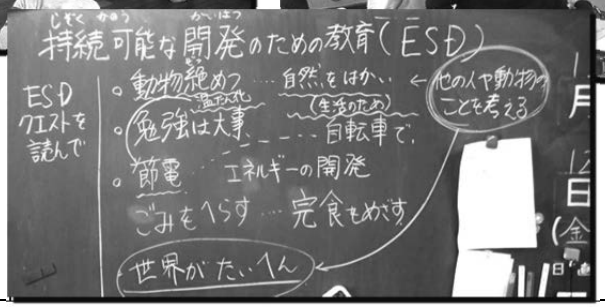
過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価（評価規準・評価方法）
導入 5	学習課題提示	今のぼくたちに何ができるだろうか			
展開 40	教材「ESDクエスト」を行う	「ESDクエスト」を見ながら思ったこと、意見を出していく。	一斉	分かったこと、気づいたことはワークシートに書き込ませる。	開発途上国が抱える諸問題について気づき、問題意識を持つことができる。（ワークシート・発言）
25	自分たちに何ができるか考える	各班で意見を出し合い、ホワイトボードを使って提案していく。	班	発表した内容は黒板に掲示し、全員が確認できるようにする。	開発途上国のために、自分たちに何ができるか考えている。（ワークシート・発言）

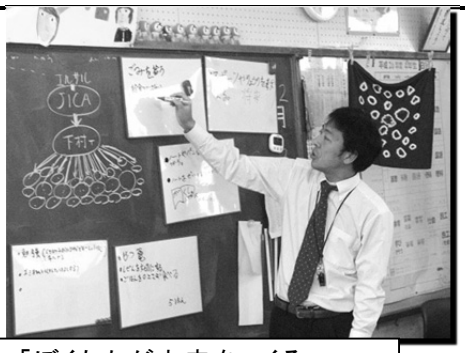
地球の温暖化、生き物の絶滅、まずしい国や戦争の続く国。世界中でこれらの問題はつながっていることがわかるね。
「みんなの毎日が未来になる」
できることから始めていこう。

【「ESDクエスト」の内容】

たくさん勉強する。
地球を汚さないようにゴミをなるべく出さない。

せつ電すること。
ごはんを最後まで食べてむだにしない。



15	現状を多くの人に知ってもらうことが大事で、君たちはそれができる存在だということに気づかせる。	意見をさらに出し合う。 今回の授業「つながろうエルサルバドル」で得た知識を自分の周りに拡げていくことに決める。 〇ミニJICA地球ひろばをつくろう。 〇どの子にも興味を持ってもらえるようはじめは楽しんでもらって、途中からまずしい国の問題を明らかにしていくのが良いね。	一斉		
		「世界を変えるために、自分のまわりを変える」「ぼくたちが未来をつくる」			
まとめ 5	本時の学習をまとめ、次時の展開を予告する。	エルサルのことを知ってもらう計画を立てよう！			開発途上国のために、自分たちに何ができるか考えている。（ワークシート・発言）
		本時の感想を書く。			

（2）授業の振り返り

［良かった点］

・子どもたちが世界の諸問題に対して当事者意識を持って考える姿が見られた。

・「ESDクエスト」を体験したことにより、日常の細かな行動が自分のできる一歩になるという認識が持てたこと。「今は日々の勉強をいっしょうけんめいやる」という意見が出たのが良かった。

［反省点］

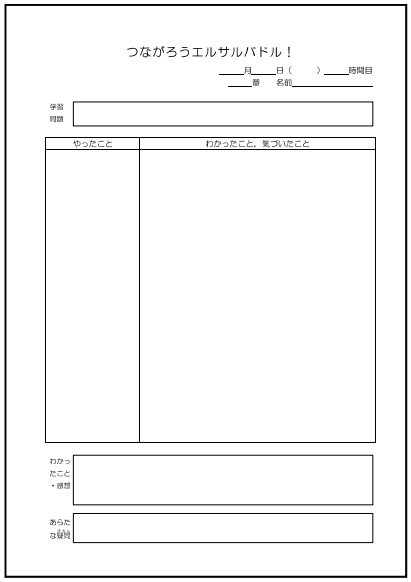
・「ESDクエスト」は改めて世界の現状を認識するのに効果的だった反面、それ以外・それ以上の考えを引き出しづらくさせてしまったかもしれない。

・いささか教師が引っ張る形になってしまったこと。

（3）使用教材　・「ESDクエスト」データ（電子黒板に投影）

・ワークシート（右）

（4）参考資料等　『ESDクエスト』文部科学省　（2013年）



つながろうエルサルバドル！

＿＿月＿＿日（　　）＿＿時間目

＿＿番　名前＿＿＿＿＿＿＿＿

学習問題

やったこと	わかったこと、気づいたこと

わかったこと・感想

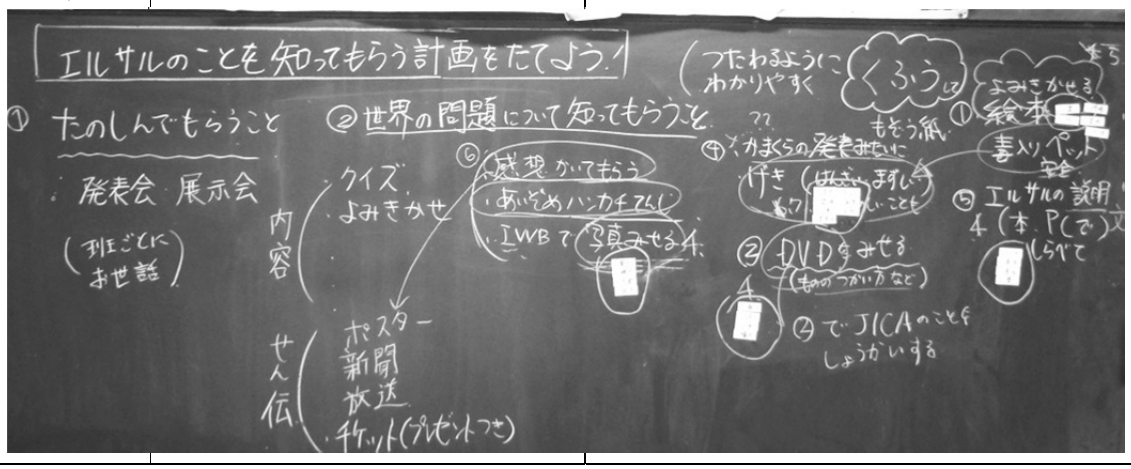
あらたな疑問

8　単元をとおした児童生徒の反応/変化

時限	小単元名	学習のねらい	感想
1	エルサルバドルってどんな国？	エルサルバドルの地理的条件、言語、文化に触れ、異文化への興味関心を高める。 【国旗やハンモックを教室に展示】	ふつうにじゅうを持っている人がいてびっくりした。 そんなに安全ではない。火山などじしんが多い国でくらしていくのが大変そう。 どんな生活をしているのか エルサルバドルでは日本のアニメが人気なのか じしんがあることやドラゴンボールというまんががあるところがいっしょなのがちょっとうれしかった。
2	エルサルバドルと日本の同じところを見つけよう！	おもちゃなどに触れ、主に日本と同じところ、似ているところを見つける。 【体験コーナーを設置した】	生水は飲まない（お腹をこわすから） サッカーが好きなのも同じ 昭和っぽいものがいっぱいあった。エルサルバドルは日本の過去の姿のよう。 木魚のような音が出る楽器があった。波のような音が出る楽器もあった。エルサルバドルにも日本と同じ遊び道具や楽器があってうれしかった。 エルサルバドルの人は親切だと思った。

3	藍染めハンカチづくり	藍染めハンカチづくりを通して日本とのつながりを感じる。 【できあがった藍染めハンカチ】	あいぞめハンカチを作った時、楽しいかな～と思っていたら、本当に楽しくてうれしかった。 ドラゴンボールといっしょで藍染もやっているんだな。 日本の技術がエルサルバドルでも使われている。つながっている。他にもどんな技術を日本から学んでいるか。
4	エルサルバドルと日本のちがうところを見つけよう！	エルサルバドルと日本のちがい、エルサルバドルのかかえる問題について知り、感想や考えを出す。 ＜内戦を描いた映画の紹介＞ ・「サルバドル/遥かなる日々」 監督：オリバー・ストーン （1986 年/アメリカ） ・「イノセント・ボイス 12 歳の戦場」 監督：ルイス・マンドーキ （2004 年/メキシコ）	内戦をしてアメリカに逃げてきて仕事が見つからず帰ってきたがそこでも仕事が見つからなくてギャングになってしまった人がいることがわかった。内戦をもっとくわしく知りたい。 国によって、していることがちがって、まずしいくらしをしている子、手伝いをしている子がいる。 ほかのどこかでもはたらいている人がいて、国が（世界が）成り立っていると思いました。 日本が平和な時に、エルサルバドルでは内戦が起きていた、ということ。内戦がおきて、まずしくなってしまってとてもかわいそうな子供達だと思った。
5	世界がもし100人の村だったら	国家や民族の多様性と世界の貧困、教育の格差などに気づく。 【自分の国のあいさつをしながら言葉が通じる友だちをさがす】	世界には、字が読めない人が 20%もいるんだな。学校にも行けずに、家の手伝いをしている人もいる。世界には車もない人がいる。 自分が字が読めない人だったらすごいたいへんだったかもしれない。 世界にはまずしい人が本当にたくさんいることがあらためてわかった。中には自分の国の字が読めない人が 20%いることがわかった。家がない人、車がない人がたくさんいる。 国によってかんきょうがちがう。字が読めない、学校にいけない子がいる。子どもなのにはたらいて家族のためのお金をかせいで、学校に行きたいのに働かされている。他の国ではちがうげんじつがある。食料をたくわえられて、学校に行けて、字が読めるのが幸せだと思った。
6	日本とちがうまずしい国のために何ができるだろうか	JICAのボランティアの活動を知り、日本のはたらきについて考える。 	日本からまずしい国のためにわざわざ海をわたって行っている人がいる。 エルサルバドルはまずしいからそれを助けるためにエルサルバドルに行っている JICA はすごいと思いました。わたしもそんな人になりたいです。 ボランティアで行ってみたくなったから大人になったらもしあったらできれば家族と行きたい。エルサルバドルはとても助かっている。なぜ家族を置いてまで行くのか。 お金あげるだけではダメなことがわかった。どうやったら JICA をおうえんするか、入れるのか。 まずしい学校、国のために、ボランティアで先生などその国のために働いている人がいると聞いてビックリした。 先生がみんなに答えを教えるみたいにみんながエルサルバドルの人々にお金や食べ物をあげていたら、エルサルバドルの人の力にならないことがわかった。

			JICA の人たちはほかの国のためにやり方などを教えてあげている。
7 まとめ	今のぼくたちに何ができるだろうか	途上国や地球環境のために自分たちに何ができるか考える。	＜自分たちにできることとして、下記板書のような「エルサルバドルのことを周りに広める」ためのアイデアが出された＞



9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

[成果と課題①:単元目標の達成]

本単元の最終授業では、途上国や地球環境のために自分たちにできることについて多数の意見が出され、今後、児童が実際に学んだことを周りに伝える活動を行うこととなった。このことからも、単元目標の「今の自分にできることを考え、行動化することができる」をほぼ達成することができたのではないかと思う。特に、具体物や体験を重視すること、本時の疑問が次時の学習課題となるよう毎授業の流れを構築したことが効果的に作用した。しかし、7(2)に記載したように、授業の途中でいささか教師がひっぱる形になったり、教材で想定されている以外の回答が出なかったという課題もあり、小単元一つ一つに子どもたちが主体的に取り組めるような丁寧な仕掛けをもっと盛り込むことができたらよかったと考える。

[成果と課題②:授業のペース]

時期的にある程度集中させて実践したため、子どもたちの興味や集中が途切れることなく学習できた。今回はほぼ毎日授業を進めたが、感想や疑問を翌日の授業にすぐにフィードバックさせることに苦労したため、次回は中一日くらいのペースで行いたい。

房日新聞
THE BONICHI SHIMBUN
第18715号
国際支援の大切さ伝える
下村教諭が4年生に授業
神戸小
大古さん

授業についての新聞掲載
「国際支援の大切さ伝える」
『房日新聞』2014 年 12 月 25 日

[成果と課題③:年間の指導計画への位置づけ]

また、本校の年間指導計画にどう位置づけていくか、その難しさが最大の課題と考えられる。今回の実践が、それっきりで終わらないようにするため、学年を越えた働きかけが必要になってくるかと思う。今考えられるのは、6年社会の国際協力の場面での授業が考えられるが、最終的には教育課程の中にしっかり組み込まれるよう働きかけていきたい。そういう意味でも、今回の実践が地方紙に取り上げられ、各学校、教員の意識を高めることに寄与できたのなら、そこにも意義があったではないかと思う。

10 教師海外研修に参加して

自分の考える「これからの教育」に、一歩踏み出せたと感じたのが7月の派遣前宿泊研修の時。それから半年で、その前の自分と比べるとずいぶん変わったと感じる。現地で関わることのできたエルサルバドル人や JICA ボランティア、仲間との関わり、帰国してからの授業実践の難しさと充実感、どれも今の自分を形づくる大切な要素だ。これからの開発教育普及を自らの使命ととらえ、時間をかけても焦らず取り組んでいきたい。